



国際鳥学会 IOC2014 —日本招致を振り返って

14 代会長 中村浩志 NAKAMURA Hiroshi

私が会長を務めることになる直前の 2005 年の年末、IOC 事務局長 Dominique Homberger から樋口前会長に、2014 年 IOC 大会の日本開催を検討して欲しいとの連絡がありました。前会長からのこの課題を検討し、2010 年のブラジル大会で IOC2014 日本開催決定にまで持って行くことが、私の 4 年間の会長としての主な仕事でしたので、その経緯を振り返ってみたいと思います。

前会長からこの話を聞き考えたことは、もし日本で開催するならば、単に会場を提供するだけであったら苦勞するだけで学会に何のメリットもないということでした。意義があるとしたら、日本で開催することを通し、日本鳥学会のレベルアップをはかることです。学会員が日本開催という共通目標を持つことで、世界的な視点から研究や保護活動を位置づけることになり、殊に 20 代、30 代の若い研究者を世界レベルまで育てることになったら学会にとって大きなメリットです。

私がこう考えたのは、私自身の経験からでした。1991 に国際行動学会が京都で開催された折、托卵鳥のシンポジウムを主催し、その後軽井沢に会場を移し、托卵鳥の国際会議を開きました。カッコウの研究ですでに業績を上げていたこともあり、呼びかけに応じ、世界の托卵鳥研究者の多くが参加しました。無理をし 40 代初めにこの会議を開いたことが、その後世界の研究者と共にカッコウの托卵行動に関する未解明の問題や進化の仕組みについて次々に解明し、日本のカッコウ研究が世界的に評価されることになったからです。

会長になって早々、IOC の日本開催について検討するため、「IOC 日本開催検討委員会」（委員長江崎保男）を設置し、招致する方向が良いとの回答を得ました。その 1 ヶ月後、ドイツで開催された IOC2006 大会で、日本は IOC2014 を招致する意思表明をしました。その後、日本開催の開催地、開催方法、経費の見積もり等をさらに検討するため「IOC 招致検討委員会」（委員長樋口広芳）を設置し、立教大学を会場に東京で開催するのがベス

トで、日本開催は十分可能とした報告をいただきました。評議員会でさらに論議を重ねて全員の賛成を得、2007 年熊本大会の総会で IOC の日本招致を正式に決定しました。

次の課題は、2010 年のブラジル大会で日本開催をいかに勝ち取るかです。「IOC 招致準備委員会」（委員長上田恵介）を立ち上げました。招致にあたり、中村司基金 100 万円を招致活動に使っていただきたいと、ご本人からのありがたい申し出をいただきました。

日本招致を確かなものにするため、IOC 事務局長の Dominique Homberger に来日いただき、会場となる立教大学を案内し、日本開催計画案についてアドバイスを受けました。彼女は、この年ブラジルで開催された IOC プログラム委員会に長期出張しているので、日本に行くことは無理と最初は言っていたのですが、そんな彼女を説得し、2008 年 11 月に 4 日間来日いただきました。私が彼女の来日にこだわったのは、2011 年に開催される国際ライチョウシンポジウムを日本に招致することに成功した経験からです。この学会の大御所であるカナダの Kathy Martin を 2007 年のライチョウ会議大会に招待し、その後乗鞍や立山を案内することで、日本開催の魅力や受け皿となる組織があることを彼女に理解いただいたことが、日本招致につながったからです。

2010 年のブラジル大会には、前回招致に敗れたスペインは立候補しないことが解りましたが、直前にメキシコが招致を表明しました。本会議で日本とメキシコの招致プレゼンテーションが行われ、両国の関係者が退場した後に評決となり、日本開催決定がその直後に知らされました。5 年間にわたる招致の検討と活動が実った瞬間でした。

IOC 招致と共にもう一つの課題は、2012 年に日本鳥学会が 100 周年を迎えることから、その準備を始めることでした。100 周年に合わせて日本鳥類目録第 7 版を出版するため、2007 年に「鳥類目録検討委員会」（委員長川路則友）、2008 年に「鳥類

目録出版委員会」(委員長柳澤紀夫)を設置し、編集作業に入りました。また、2009年には100周年の記念誌の出版を検討する委員会も設置され、準備に時間がかかる事業からスタートしました。

IOC日本開催決定を最初の第一歩(ホップ)とすると、100周年記念事業の成功が次のステップ、2014年のIOC日本開催がジャンプになります。この3段階を通し学会を大きく発展させるのが、私

の会長当時のスローガンでした。最初の第一歩は実現できましたので、次のステップとジャンプでいかに高く飛び、学会の発展につなげるかは、これからの課題です。多く会員が参加し学会をあげての取り組みと準備が今から必要です。一部の人によるこじんまりした事業に終わらないことを切に願っています。